

『源氏物語』 続編の主人公造型の方法に関する一視点 — 薫と女一宮・女二宮を中心に —

金兌映 (韓国外国語大学大学院博士前期課程)

【キーワード】 薫、光源氏、柏木、主人公、劣位、続編

1. はじめに

『源氏物語』第三部の主人公薫をめぐるには、人物造型論、主題論、表現論など、多様な観点から数多くの論考が出されている。論文の数だけ見ても、正編の主人公光源氏に比べて決して少ない方ではなく、『源氏物語』続編への研究者たちの高い関心を物語る。

薫を把握する様々な観点の中で、注目すべきは、続編の物語構造の中で薫という主人公の持つ意味であろう。第三部を〈負〉の世界¹として見る観点は、第三部を構成する一つの要素であるはずの正編と続編の相関、正編と続編との関り合いの上で成り立つ『源氏物語』という全体を理解する上で有効であるといえる。第三部は、「中心のなき世界²」というふうに言われたりもするが、薫を中心に据えて第三部の物語を読み返してみたとき、新たに見えてくる何かがあると思う。そして薫を中心としてみたとき、道心のあるものがどのようにしてそれを妨げられるか³を描いた物語としても読めるのである。神野藤昭夫氏は、薫の身の芳香が象徴するものの一つとして、「闇の世界の主人公性⁴」を挙げている。第三部の後半部に入ると、本来の目的であった道心からも、そして恋からも遠ざかっている薫の様子が描き出される。「負の世界の主人公」として、薫の恋が不成立に導かれていくとするならば、それは具体的な物語の表現として、その理路を把握することができるであろうし、光源氏の物語との相関の中でその表現の意味を把握することも有意義な作業であると思う。

本稿では、続編の主人公造型の方法について論じるにあたり、薫への女二宮降嫁の経緯が語られている宿木巻と、薫の女一宮思慕とその低迷のありさまが描かれている蜻蛉巻に注目したい。今上の女二宮を得ていながらも、明石中宮のゆかりである女一宮を思慕する薫の心のありかたは、続編の物語世界とどこかわりあうか、そしてそこから見えてくる主人公像とはいかなる内実を持ったものであったかを分析し、続編の主人公造型の方法と意味について新しい光をあててみたい。

1 小嶋菜温子「女一宮物語のかなたへ—源氏物語〈負〉の時間—」『国語と国文学』58巻8号、東京大学国語国文学会、1981年。

2 三谷邦明「源氏物語第三部の方法—中心の喪失あるいは不在の物語—」『文学』50巻8号、岩波書店、1982年。

3 岡崎義恵「光源氏の道心」『源氏物語の美』宝文館、1960年、84頁、初出は、『日本文芸学』岩波書店、1935年。

4 神野藤昭夫「匂と薫」『源氏物語講座』4、勉誠社、1992年、25-26頁。

2. 宿木巻の方法―「女二宮」降嫁と薫

「宿木」巻の薫が、今上女二宮の婿になるということが、物語全体の流れにおいていかなる意味を持つのかということについては、従来、様々に論じられてきた。宿木巻巻頭における女二宮降嫁の意味に注目する細野はるみ氏は、「この宿木巻での女二宮の導入、薫との縁談という一連の場面設定は、同じ『源氏物語』内での先蹤として若菜上巻の出発時点での女三宮の降嫁の一件をかなり意識し、作品としての新状況の創出に応用しようとしている。…それは宿木巻が宇治の物語から都の物語へと戻るための大々的な姿勢の捉え直しであり、前巻との断絶、唐突さも、主人公の本来の環境を作品中に回復するための手続きであった⁵」と述べている。また、宿木巻頭の女二宮降嫁が、第二部の若菜上の巻頭の女三宮降嫁を意識しながら書かれているということから、第二部との関係、特に引用表現や主題的位相における関連性に注目する論⁶も出されている。本稿では、こうした先行研究の成果を踏まえた上で、宿木巻の薫をめぐる諸問題の中、続編の主人公造型の方法とその意味についていくつかの表現に着目して分析していきたい。

帝の「この花一枝ゆるす⁷」(⑤ 378)という言葉によって触発された、薫と帝との贈答が描かれることによって〈若くて前途有望な、帝の信望厚い薫像〉が浮き彫りにされ、今上女二宮の縁談は、やがて薫への降嫁へと落ち着くかのようにであった。が、帝と薫との贈答が語られたすぐ後のところに、女二宮との縁談に対する薫の心内が述べられている箇所は注目される。

いでや、本意にもあらず、さまざまにいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過ぐしつ年経ぬるを、今さらに聖よのもの、世に還り出でん心地すべきこと、と思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもおほゆる心の中ぞ、あまりおほけなかりける。(宿木⑤ 379)

薫が「后腹」の女一宮に憧れていることは、薫と宇治の姫君たちとの交渉が語られていた時も繰り返し述べられていたが、ここでは、「女一宮」という呼称で語られるのではなく、「后腹におはせばしも（中宮腹（の女一宮）であったら）」と薫の本音が語られており、そうした薫の思いを語り手が「あまりおほけなかりける」と評しているのである。

「おほけなし」という語は、浮舟と少将との結婚を準備しながら、親に認知されて育っていたら薫との結婚もあり得ただろうと思う中将の君の心内である「親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば、…大將殿ののたまふらんさまにも、おほけなくともなどは思ひたたざらまし」(東屋⑥ 33)などの用例から窺えるように、身分を弁えぬ大それた気持を

5 細野はるみ「女二宮の縁談」『講座源氏物語の世界』8、有斐閣、1983年、239頁。

6 池田和臣「引用表現と構造関連をめぐって―源氏物語第三部の表現構造―」『源氏物語の探究』第17輯、風間書房、1990年。

7 本文は、阿部秋生 他『源氏物語』1～6「新編日本古典文学全集」小学館、による。括弧内の表記は巻名、新編全集の巻数、頁数を表す。

言うのが原義で、第二部の柏木に最も特徴的に用いられている言葉でもあった⁸。そして「おほけなし」は、分不相応な思慕というだけでなく、密通事件の罪に関わる言葉として、今西祐一郎氏をはじめ、先学に指摘されている⁹のだが、ここでは、「おほけなし」が、柏木のような密通事件の当事者だけではなく、「まめ人」夕霧のような、密通とは無縁のように思われる人物にまで用いられていることについて少し触れておきたい。若菜上巻、朱雀院の婿選びにおいて光源氏への降嫁に至らしめるためのダシに使われた¹⁰とも思しい夕霧が、光源氏への降嫁後、しぜんとその様子や人柄を見聞きしていた女三宮と、野分巻での思いがけぬ垣間見の後、ひそかな情念を心の奥底に抱いていた紫上とを比較する条では、「わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつるをりありなむやとゆかしく思ひきこえたまひけり」(④135)と、自分の紫上への恋慕は大それた野心からではないということがその心内において強調されている。けしからぬ事を考えているわけではないという夕霧の心内は、若菜下巻で光源氏が主催した女楽で、紫上や女三宮など高貴な女性たちの気配に接した際も「あながちに、あるまじくおほけなき心などはさらにもしたまはず、いとよくもてをさめたまへり」(④194)と、繰り返されている。先引の、女三宮と紫上を比較しながら紫上の素晴らしさを思う夕霧の心内語は、女三宮をあきらめられずに光源氏が出家の本意を遂げたあかつきにはと宮を手に入れる機会を狙っている柏木の様子が描かれている、その直前に置かれている。自らの「おほけなき心」を表に出し、結局は女三宮との密通へ突き進んでしまう柏木と、自らの「おほけなき心」ではないことを強調するにとどまっている夕霧とのコントラストをなしてもいる、第二部の鍵言葉である「おほけなし」の語が、薫への女二宮降嫁が決定しようとするとき、薫の心内を語る語り手の評語として用いられているのである。「后腹におはせしも…あまりおほけなかりける」とある箇所を見て読者が連想するのが、薫同様に「女二宮」を得ていながらも、より高貴な女性に望みをかけ、密通事件を犯して身を滅ぼしてしまった柏木その人であることは、疑いがたいのではなからうか。語り手はここで、「后腹」の女一宮にあこがれる薫の心内が「あまりにも分をわきまえない高望みである」と評しているのである。女二宮降嫁は、史上の嵯峨皇女潔姫の藤原良房への降嫁と重ね合わせられており¹¹、

8 1) みづからも、大殿を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、かかる心はあるべきものか、なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきこと、と思ひわびては、かのありし猫をだに得てしかな、(若菜下④155)

2) 「いで、あなおほけな。それをそれとさしおきたてまつりたまひて、また、いかやうに限りなき御心ならむ」と言へば、うちほほは笑みて、「さこそはありけれ。宮にかたじけなく聞こえさせ及びけるさまは、院にも内裏にも聞こしめしけり。…「今はよし。過ぎにし方をば聞こえじや。ただ、かくありがたきものの際に、け近きほどにて、この心の中に思ふことのはすこし聞こえさせつべくたばかりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」とのたまへば、「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをも思しよりけるかな。」(若菜下④219～220)

3) 数ならねど、いとかうしも思しめざるべき身とは、思うたまへられずなむ。昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに籠めてやみはべりなましかば、心の中に朽して過ぎぬべかりけるを、なかなか漏らし聞こえさせて、院にも聞こしめされしを、…いかばかりしみはべりにけるにか、年月にそへて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、いろいろに深く思うたまへまざるにせきかねて、かくおほけなきさまを御覽ぜられぬも、かつはいと思ひやりなく恥づかしければ、(若菜下④224～5)

9 今西祐一郎「「おほけなし」から「けしからず」へ―「浮舟」の状況―」『国文学』17巻15号、学燈社、1972年、吉村研一「光源氏と柏木の密通における罪意識の語り分け―「おそろし」と「おほけなし」の果たした役割」『物語研究』11、物語研究会、2011年、など。

10 秋山虔「若菜巻の始発をめぐって」『源氏物語の世界』東京大学出版会、1964年、155頁。

11 『松永本 花鳥余情』『源氏物語古注集成』第一巻、桜楓社、1978年、319頁。

物語が描き出そうとしている薫像も、良房のような、帝を含め世間の信望厚い前途有望なイメージの強調へとつながってくる。帝と薫の和歌贈答の場面がそれを端的に示していると思われるが、ここでは、二人の贈答があったそのすぐ後に語られている薫の心内において、薫と柏木とのイメージの重ね合わせがされている理由は何か、という点を問題にしたい。潔姫の結婚という、よく知られた史実を用いてまで〈若くて前途有望な、宮廷社会において信望厚い薫像〉を浮き彫りにしておきながら、すぐ後のところで薫の格下げをしているのには、何らかの重要な理由があるように思われるのである。

3. 「ただ人」薫をめぐる

宿木巻に見られる薫への女二宮の降嫁、匂宮と六君との結婚は、薫の結婚の件、そして匂宮と六君との縁談が、全く別個の事件として語られるのではなく、二つの事件が互いに影響し合いながら、大君亡き後の物語世界を切り開いている。そして言われるように、中君物語は、若菜巻以下の紫上の苦悩の「二番煎じ¹²」に定位してしまうことなく、ひとつの方向性—薫の内面の問題に収斂してくる物語構造—を持つ物語展開のために奉仕すべく、方向づけられているのであった。中君の懐妊を暗示する記事より少し先に、薫が女二宮との縁組を承諾し、大君を想う条に続くところには、匂宮と中君の二人の関係は、臣下の夫婦仲ではないということが、中君の心内語の中に述べられている（宿木⑤383）が、これは、匂宮に六君との結婚を勧める明石中宮の言葉の中に「ただ人こそ、ひと事に定まりぬれば、また心に分けんことも難げなめれ」（同⑤381）とあった箇所と照応する。「ただ人¹³」は、本妻以外にも妻をもつことが許される皇族とそうでない人々の立場を対比的に捉える用い方をするがあるが、この単語が、宿木巻の、六君と匂宮の婚姻をめぐる人物たちの会話や心内語の中に繰り返し用いられている。そしてこの語は、女二宮降嫁を決定づけるものとなった、今上帝と薫の和歌贈答の場面が語られた後にも、見えている。

さばれ、なほざりのすきにはありとも、さるべきにて御心とまるやうもなどかなからん、水漏るまじく思ひ定めんとても、なほなほしき際に下らん、はた、いと人わろく飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。「(中略) 帝だに婿求めたまふ世に、まして、ただ人の盛り過ぎんもあいなし」など、そしらはしげにのたまひて、(宿木⑤380)

今上帝の婿探しが一段落した後、夕霧が六君と匂宮との縁組を画す条においても「ただ人」の語が見え、既に引用した明石中宮の言葉や、匂宮の、女性関係の方面に関して移り気であることへの言及と響き合いつつ、物語は、匂宮と六君の婚約へと進展する。夕霧の心内語に見える「ただ人」の語は、皇族なら複数の妻を持つことが可能という中宮の論理と照応しながら、皇族でない人々の立場を照らし出す。六君の結婚問題を思案する夕霧の心中思惟の中で、匂宮が組上に載せられるのとほぼ同時にして、「並々の身分の妻になりさがることは、

12 千原美妙子「大君・中君」『源氏物語講座』4、有精堂、1971年、271頁。

13 他に宿木巻の「ただ人」に注目した論考として、小嶋菜温子の前掲論文、青島麻子「宿木巻における婚姻—「ただ人」の語をめぐる」『国語と国文学』85巻4号、東京大学国語国文学会、2008年、がある。

世間体も悪く不満も残るだろう」という思いがその心の中に浮かんでくることにも注意したい。

若菜上巻の女三宮降嫁が決定するまでの物語においては、登場人物たちの会話や心内語による展開¹⁴、女三宮周辺の人々の意思の表示が交錯しながら作る物語の流れの中で、光源氏への降嫁を決断する朱雀院ひとりの判断が際立つといった物語展開が見られていた。女三宮降嫁が決まる以前、婿選びに苦慮する朱雀院の心内には夕霧の存在もあったが、女三宮の場合、宮の欠点を補い庇護してくれる親がわりの相手であることが条件であるため、ひとりの女性を守り続けるという夕霧の美点は、光源氏の「旧りせぬあだけ」(若菜上④28)にまさるものとしては語られておらず、若く前途有望といった求婚者の資格として考慮される要件も、光源氏の前では、女三宮の夫になるべき資格として十分に評価されない。光源氏こそが、皇女独身主義という降嫁の最大の難関を乗り切ることのできる唯一の人物であり、その「光」を前に、他の「ただ人」(同④31)たちは、女三宮と結婚するには「限界」のあるものとされる。そして、朱雀院に「若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる」(同④27)と評されていた「ただ人」の一人である夕霧の取り柄は、今上帝をして、薫を女二宮の夫にという決断に至らせた最大の理由になっており、当時、降嫁への賛意を示していた今上帝の言辞の中には「人柄よろしとても、ただ人は限りあるを」(同④39)という言葉が見えていた¹⁵。このように若菜巻においては、同じく臣下でありながら「ただ人」の難点を克服できる唯一の人物である光源氏と、そのような美質を持ちえていない夕霧のような人物たちとの差別化がなされ、巨大な「後見¹⁶」としての主人公像の一面を見ることができたが、宿木巻では、「ただ人」の語を媒介にした若菜巻と宿木巻との交渉が見られることにより、主人公薫が相対化され、その理想化に「限界」が設けられていると見ることもできるのではないだろうか。「都の物語へと戻るための大々的な姿勢の捉えなおし」である宿木巻で、主人公が「ただ人」の語により相対化されていることの意味は重いと考える。しかも前節で見てきたように、物語の舞台が変わり、今上女二宮との結婚という新しい要素が薫に加わろうとするところに、薫と柏木との重ね合わせが見られるのである。

女二宮降嫁を期に、薫の女一宮思慕が浮かび上がってくるのは、実父柏木が女二宮を得てもなお女三宮思慕へ傾斜していくのと同じような軌道を描くものの、最も肝心な密通という事態は起こらない。そのことは、薫の道心がその出生の疑惑に結びついていることが薫の物語の始まりの部分に語られていながら、薫が弁の尼から柏木の遺書を渡されたことが述べられた後、柏木の問題が物語の表面上で殆ど語られなくなるのと関わる。われわれは、物語の表現構造のレベルにおいて薫に遺された柏木の影を追っていくしかないのであるが、薫の場合、「ただ人」である点が強調されることが、第二部で柏木が引き起こした密通事件で六条院世界が相対化されていったのとは逆に、柏木の子である薫を相対化することによって光源氏の重さを再び浮き彫りにすることにつながっている。

14 秋山虔の前掲論文。

15 小嶋菜温子の前掲論文にも同じ指摘がされている。

16 室田知香「若菜上巻冒頭における「後見」の論理と光源氏—史上の皇女の入内・結婚と『源氏物語』とのあいだ」『古代中世文学論考』第21集、親典社、2008年、「女三宮の裳着と「後見」光源氏」『国語と国文学』88巻2号、東京大学国語国文学会、2011年。

天の下響きていつくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、
なほあかず心苦しく見ゆる。(宿木⑤ 474～5)

第二部の密通から生を受けた薫は、実父柏木と同じような道を歩かされるように見えながら、その内実において、両者の間には大きな差が存在する。女二宮の降嫁に先立つ裳着の場面で、薫は、語り手によって「ただ人」と称される。引用部の直前には、中君の出産とその産養のことが語られている。宿木巻は、中君との関係において薫の恋がいかに進展しようとも、最後には、匂宮—中君—薫の三人の関係性の中で、薫一人が取り残されるという物語構造を有している。中君の境遇が安定したこと、つまり、薫の二度目の恋が成就しないということがはっきりとした形であらわれた後、薫の「ただ人」であることが語り手によって再び物語に想起される。さらにここで付け加えておきたいのは、これまでも強調してきた正編と続編との相関構造についてである。引用部のすぐ後には、夕霧の「故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今とはやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」(⑤ 475)という言葉が見える。この言葉から、女三宮降嫁が光源氏の人生晩年に行われていたこと、そして源氏に劣る夕霧自身は、柏木の死後、その未亡人である女二宮を娶ったことが想起される。この夕霧のセリフは、二つのことを暗示している。先ず、この夕霧の言葉が、柏木が女三宮との密通を犯した後、妻女二宮を見ながら思う「同じくは、いま一際及ばざりける宿世よと、なほおほゆ。もろかづら落葉をなににひろひけむ名は陸ましきかざしなれども」(若菜下④ 233)という部分と照応しているということである。ここは、在位の帝の「盛りの御世」における皇女降嫁という、「ただ人」薫の異例の繁栄ぶりを右大臣夕霧の口を通して改めて強調している箇所ではあるが、この夕霧こそ、夕霧巻において、柏木が「落葉」であるとしながら軽い扱い方をしていた朱雀院の女二宮と結婚しており、そのことを「我得は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」と回想しているのである。柏木の手習歌「もろかづら落葉をなににひろひけむ…」は、まさにこの場面と響きあっていると思われるのであり、柏木—落葉の宮(女二宮)—夕霧の三人が、じつは結婚という形で物語においてつながりあっていたことをこの箇所は顕にしており、柏木の屈折した身分意識の反映でもある朱雀院の〈女二宮〉の降嫁と、薫のおしもおされもせぬ栄華の象徴である今上〈女二宮〉の降嫁との相違をも暗示している¹⁷と見ることのできるのではなからうか。二つ目は、薫と光源氏との位相の違いである。すなわち光源氏には栄華獲得の過程が描かれているのに対し、薫にとっては栄華は与えられてしまうものとしてあり、栄華を獲得する、あるいはその維持のために尽力する薫は描かれぬ。薫は源氏の多様性を削ぎ落とした、源氏の一部のみを受け継いだ主人公である¹⁸。表現面で見受けられる、薫と、柏木との主題的関連性を解く鍵はそこにある。臣下でありながら「ただ人」の限界をはるかに乗り越えていた光源氏と、薫との位相の隔たりは、第三部の物語世

17 皇女の女二宮を妻として迎えながらもそれに満足できず、内親王である女三宮を求め続けながら、光源氏への劣等感を抱いている柏木と、あくまで栄華の中に身を置く人物として描かれている宿木巻の薫とは、その身分意識と栄華という面においては、大きく相違している。

18 池田節子「光源氏から薫へ—恋愛と道心の面から—」『源氏物語表現論』風間書房、2000年、253頁。

界を、正編の物語世界との相関構造の中で綿密に見ていく作業を通してはじめて見えてくるのではないだろうか。すなわち、薫を「ただ人」と規定することによって、物語は、薫を主人公として高めておきながら、同時にその理想化に「限界」を設けようとしている。続編の主人公造型の方法をもう少し詳しく見るために、宿木卷々末近くの藤花の宴の場面についても見ておく必要があるだろう。

4. 藤花の宴—およばぬ枝に袖かけてけり

宿木卷の冒頭において語られている薫と今上女二宮との縁談が、この巻において如何なる薫像の形成へと繋がっているのか、もう少し具体的に見てみよう。ここでは、巻の巻末近くに語られている薫と女二宮との結婚前夜の藤花の宴の場面に注目したい。宿木巻頭部分が、若菜上巻の冒頭を意識して書かれていることについて既に述べた。光源氏の場合は、女三宮を六条院に迎えていたが、この場合は臣下という身分の制約があるため、薫は「婿」として参内することになる。藤壺での藤花の宴の史実の例として『花鳥余情』は、源高明『西宮記』に見える天曆3年(947年)の村上天皇当時の記事を引いている。『源氏物語』中で藤花の宴は三度見えるが、一度目の花宴巻でのものは右大臣邸での、二度目の藤裏葉巻でのものが内大臣邸での私的な催しであったのに対し、ここでは宮廷の公的な行事とされており、すべて薫の栄光を証するものとなる¹⁹。

御盃ささげて「をし」とのたまへる声づかひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとど見なしさへそふにやあらむ。さし返し賜りて、下りて舞踏したまへるほどいとたくひなし。上藤の親王たち大臣などの賜りたまふだにめでたきことなるを、これは、まして、御婿にてもてはやされたてまつりたまへる、御おぼえおろかならずめづらしきに、限りあれば下りたる座に帰り着きたまへるほど、心苦しきまでぞ見えける。(宿木⑤482～3)

下線部に注意したい。語り手は、上藤の親王や大臣などが盃を賜るよりも、これは帝の「御婿」として更にめでたいことであるのに、臣下としての「限り」のため、末席に戻るのが「心苦し」というのである。この箇所は、前節で引いた女二宮裳着の場面に「天の下いつくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、なほあかず心苦しく見ゆる」とあった箇所と照応しており、薫の異例の栄達を強調しておきながらも、その理想化には一定の「上限」を設けていることがここでも見てとれる。公の行事であったため、かえって官位による席次の定めが露呈してしまったのである。さらに、藤花の宴の場面には、かつて紅梅巻で、匂宮と紅梅の花をめぐる歌のやりとりをしていた紅梅大納言が登場し、薫の栄光に焼きもちをやくコミカルな役割を演じさせられる(「人柄は、げに契りことなめれど、なぞ時の帝のことごとしきまで婿かしづきたまふべき。またあらじかし。九重の内に、おはします殿近きほどにて、ただ人のうちとけさぶらひて、はては宴や何やともて騒がるることは」(同⑤483～4))。この人物は、故致仕の大臣の次男で、柏木の弟であると言われており、薫は

19 細野はるみの前掲論文、239頁。

柏木の実子であるから、この二人は血筋的に近い関係であるはずなのに、大納言はそれを知る由もなく、同一家系の薫の栄光を妬んでいる。

藤花の宴の場面におけるクライマックスともいえる、次のような唱和歌を見てみよう。

すべらきのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり
うけばりたるぞ、憎くや。
よろづ世をかけてにはほはん花なれば今日をもあかぬ色とこそみれ
君がため折れるかざしは紫の雲におとらぬ花のけしきか
世のつねの色とも見えず雲居までたちのぼりたる藤波の花（宿木⑤484～5）

ここでは「藤の花の宴」（⑤481）に相応しく、「藤の花」のイメージが中心的に詠み込まれている。藤の花は藤原氏の表象であるとされ、「ただ人」薫の異例な栄光ぶりを強調しているこの場面の語りから見て、この唱和が置かれている理由も明らかであろうが、注意しておきたいのは三番目の「君がため…」の歌である。この歌は、帝と大納言の歌の間に挟まれている点から、右大臣夕霧の詠歌と思われるが、『花鳥余情』は、この歌が『拾遺集』の藤原国章の作「藤の花宮の内には紫の雲かとのみぞあやまたれける」（雑春・1068）によるとする。『拾遺集』の詞書から、延喜の御時、藤壺の藤花の宴で詠まれた歌であることが分かる。「紫の雲」は「藤の花」の見立てとして用いられており、「天人の飛雲や聖衆来迎の雲としての瑞雲の印象とも重ねて、天皇や宮中を賛美²⁰」している。この拾遺集歌から、三番目の夕霧の歌も、女二宮を賞賛するとともに、それを得た薫の幸運を讃えている歌として読めるが、同じく「紫の雲」が詠まれている『拾遺集』の歌、「紫の雲とぞ見ゆる藤花いかなる宿のしるしなるらん」（雑春・1069・右衛門督公任）を見よう。この一首は、長保元年（999年）11月1日に入内した藤原彰子の屏風歌で、彰子が中宮となったのは翌2年2月25日である。『能因歌枕』に「むらさきの雲とは、さきさきのことをいふ²¹」とあることからすれば、この歌は立后を予祝しているとも解せるのである。だとすれば、この「君がため」の歌に「紫の雲におとらぬ」とあるのは、「后腹」（宿木⑤379）ではない女二宮を讃えていることとして読めるのはなかろうか。これまで『源氏物語』において「藤の花」に喩えられている人物は、明石中宮であった（「かの見つるさきざきの、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる」（野分③284～5））。女二宮が、今上帝の中宮で、匂宮をはじめ多くの皇子皇女の母として時めく明石中宮の腹ではないこと、「君がため」の歌が女二宮の後腹ではないことを示していることなどから、ここの場面が、薫の栄光を褒め讃えつつも、その一方で、「后腹」でない女二宮の系譜を暗示しようとしている意図がうかがえるのである。

上の唱和歌の中、一番目の薫の歌「すべらきのかざし…」における「およばぬ枝」という表現は、女三宮を垣間見した後、宮に贈った柏木の歌「よそにみて折らぬなげきはしげれどもなごり恋しき花の夕かげ」（若菜上④148）に対する小侍従の返歌「いまさらに色にな出でそ

20 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』『新日本古典文学大系』7、岩波書店、1990年、306頁。

21 「能因歌枕」佐佐木信綱編『日本歌学大系 第1巻』文明社、1940年、90頁。

山桜およばぬ枝に心かけきと」にも見える。薫の歌では「およばぬ枝に袖かけてけり」となっており、「帝の御かしづきむすめ」を手に入れたという強い自負をうかがわせる。「及ぶ」という表現は、『宇津保物語』の「藤原の君」巻で、源正頼と「后腹」の女一宮との結婚第三夜に詠まれた帝の正頼への贈歌「岩の上に並べて生ふる松よりも雲居におよぶ枝もありなむ²²」(①130)などの用例から「届く、達する」という第一義的な意味を持つ言葉であることが分かる。若菜上巻で女三宮の婿選びに苦慮する朱雀院は皇女の独身をよしとする理由を述べながら、「昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどのことをば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今の世には、すきすきしく乱りがはしきことも、類にふれて聞こゆめりかし」(④33)と、皇女が世間で許されない身分違いの人に懸想された場合の危うさについて語るが、この箇所は、これより少し先に女三宮の乳母が皇女独身主義を述べながら「わが心ひとつにしもあらで、おのづから思ひの外のこともおはしまし」(④29)と、女房たちの手引きなどにより皇女の周辺に不慮の事態が起こることを懸念している部分と響き合っている。不吉な言葉は現実となり、六条院での蹴鞠の日に偶然女三宮の姿を見た柏木は、ついに女三宮と密通を犯してしまう。光源氏に対する罪意識におののき、現実のすぐそばにいる女二宮と、自らの幻想の中でますます恋慕の情が深まっていくばかりの朱雀院最愛の女三宮を比べながら「同じくは、いま一際及ばざりける宿世よ」(若菜下④232)との思いを彼は抱かずにはいられないのであった。宿木巻の藤花の宴の場面における薫の歌に見える「およばぬ枝に袖かけてけり」という表現は、第二節で見た「おほけなし」の語と同様、第二部の柏木密通事件がその背景としてあるのである。

物語は、おしもおされもせぬ榮華にひたすら身を置く薫像を築き上げていく一方で、かれと柏木とがいかに関連深いかということ、語りや表現のレベルにおいて、読者の眼前に露呈させつづける。一方で、宿木巻の薫が柏木と重ね合わせられることで、薫が柏木と同一視させられるべく、物語は方向づけられていない。相似よりも、むしろ相違を強調すべく、第三部の物語世界は方向づけられていると思われる。

まず柏木の厭世観は彼が生きた現実世界での不如意に由来する。右衛門督柏木は、皇女を妻にと思い決めて独身を通し、叔母の朧月夜の君を介して朱雀院の女三宮を望むが、適えられずに終わった。それが柏木の道心の因となるわけだが、彼の場合は、意のままにならぬ現実との確執があった。女三宮との結婚が適わないことを知った後も、

かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、なほ圧されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるもの思はせたてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。(若菜上④135～6)

22 『宇津保物語』の引用は、中野幸一校注『うつほ物語』1～3「新編日本古典文学全集」小学館、による。括弧内の表記は巻名、新編全集の巻数、頁数を表す。

と、「この自分だったら、そんな物思いをおさせ申すようなことはなかつたらうに」と、宮に同情する一方、「なるほど自分はまたとなく尊い宮の相手として不相応ではあるけれど」と、屈折した心内が語られている。柏木が選ばれなかったのは、「まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり」（同④36）とあるように、身分が低く、女三宮の相手として不適格だと考えた朱雀院の判断によるものであったが、女二宮を正妻として迎えた後も、柏木の女三宮への恋情は募っていく一方である。柏木の本意である女三宮が、皇統を受けた藤壺女御腹であるのに対し、女二宮の方は同じ皇女でも母方の身分が低く、父朱雀院の後援もないと語られている（「かうやうに思しよらぬ姉宮たちをば、かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし」（若菜上④36））程であった。皇統へのこだわりは薫にもあったが、柏木の屈折した身分意識を物語に描き出すことになる朱雀院の女二宮降嫁と、薫のおしもおされもせぬ栄華の象徴である今上女二宮の降嫁とは、その内実において相違する。藤花の宴の場面は、女二宮を得ていながら最高の価値である女一宮を思慕する薫の心内が語られていた宿木巻冒頭部と呼応するものであった。そして薫の女一宮思慕とその低迷のありさまが物語上に鮮明に描き出されるのは第三部の後半部、蜻蛉巻においてである。薫の女一宮思慕の意味を具体的に見るため、宇治十帖後半部の本文を詳しくみてみる必要があるように思われる。

5. 女一宮と薫—明石の浦は心にくかりける所かな

蜻蛉巻は、前半では宇治を舞台に浮舟失踪後の残された人々の様子が描き出され、後半に入ると舞台が都に変わり、薫の女一宮思慕を基軸とした宮廷人たちの生活が、時に退廃的とも言われる側面においてまで、こまごまと描かれてゆく²³。失踪した女主人公がその姿を全く見せないまま話が進んでいく蜻蛉巻のあり方は、主人公の造型方法という面からしても注目すべきところがあると思われる。

薫の女一宮に対する思いは、以前の物語においても語られていた。椎本巻で薫が宇治の姫君たちをかいま見る場面には、「女一宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる」（⑤217～8）とあり、中君の姿を見て女一宮を思い起こしている。総角巻には、「女一宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむをりに、かばかりにてももの近く御声をだに聞きたてまつらむとあはれにおぼゆ」（⑤278）とあった。これは明石中宮の「いよいよ若くをかしきけはひ」に接したことを契機として、女一宮への憧憬が顔を出したものである。薫の女一宮思慕は、物語に当面語られる大君への愛とは直接的な関係なしに存在する、むしろより〈根源的な憧憬〉であると見ることができる。ほとんど具体性を持たず、ただ想念の中で培ってきた憧憬の女性、女一宮が、薫のかいま見によって物語に姿を現す。

唐衣も汗衫も着ず、みなうちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。（蜻蛉⑥248）

23 宗雪修三「『世づかぬ薫』—蜻蛉の巻の独詠歌と主題—」『物語研究』1、新時代社、1969年、288頁。

夏、明石中宮の御八講の日、小宰相の君のもとを訪れようとした薫は、偶然女一宮を垣間見てその類ない美しさに魅了される。上の場面は、垣間見る薫の視点と一体化して語られている。一般的にかいま見の場面では、見る対象が誰か判明した時点で敬語がつくが、ここでは「白き薄物の御衣着たまへる人の」とあり、最初から敬語が使われている。薫は女一宮だと分かっているのである。ただ想念の中で培ってきた憧憬の女神像が突然に開帳されたという点で、薫の体験は父柏木の体験と重なる²⁴。

柏木の女三宮へのかいま見から密通に至る物語の流れにおいては、柏木が女三宮を「見た」という体験が重要な役割を果たしている。柏木と蹴鞠の場に同席していた夕霧は、女三宮のふるまいを「いでや、こなたの御ありさまのさはあるまじかめるものを、…なほ内外の用意多からずいはけなきは、らうたきやうなれどうしろめたきやうなりやと思ひおと」すのであったが、柏木は、ゆくりなくも宮の姿を見ることができたのを「わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと契りうれし」(若菜上④144)と、自分の恋がかなえられる前兆ではないかと勝手に解釈しているのである。宮への慕情がついた柏木が小侍従を責める場面に「その夕より乱り心地かきくらし、あやなく今日はながめ暮らしはべる」(同④148)とあるのは、「右近の馬場のひをりの日、向かひに立てたりける車の下簾より、女の顔のほのかに見えければ、詠んでつかはしける / 見ずのあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」(古今・恋一・在原業平、伊勢物語・99段)を踏まえている。柏木の手紙の「見もせぬ」の引歌に気がついた女三宮は、「大将に見えたまふな」と夕霧が宮に近づくことを警戒していた光源氏の言葉を思い出し、気をもんでいるのであった。柏木は、あの運命的な垣間見の場面をつくった女三宮の唐猫を入手する目的で東宮に参上し、「六条院の姫宮の御方にはべる猫こそ、いと見えぬやうなる顔してをかしうはべしか。はつかになむ見たまへし」(若菜下④156)と東宮の好奇心をかきたて、猫が女三宮から東宮のもとへ送られたことを知っては再び参上し、「いづら、この見し人は」(同④157)と、ついにその唐猫を手に入れたのであった。唐猫に愛着を見せる柏木の異常行動は、語り手から「すきずきしきや」(若菜上④142)と評されたりもする。女三宮との密通の場面で、柏木は、「いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひ」(同④225)を全身で感じながら、惑乱する。こうしてみると、柏木が女三宮を「見た」という体験が物語展開において重要な原動力として立ち働いていることが分かるのである。

柏木のかいま見は、女三宮との密通事件をひき起こすきっかけとして作用したが、薫のかいま見は、女一宮との密通へと進展しない。薫は、宮への恋情を外部に発散させることなく、内向させてゆく。かいま見露見の危機にあった薫は、「誰とも見えじ、すきずきしきやうなり」(⑥250)と思い「隠れ」るのであり、つづく物語には、次のような薫の心中思惟が語られてゆく。「かの人はやうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめて、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな。(中略)などて、年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらん、なかなか苦しうかひなかるべきわざにこそ」(⑥251)。薫の女一宮をかいま見する視線に即して語ってきた語り手が、ここではその薫を「かの人」として、距離を置いてその心内を語る。長年のあ

24 篠原昭二「都の薫一薫論(1)」『講座源氏物語の世界』9、有斐閣、1984年、160頁。

こがれの対象であった女一宮をかいま見たことが、かえって薫の苦悩を深化させている。柏木が小侍の手引きで女三宮に近づく場面、宮の体に接近する直前に柏木の脳裏を支配していたのは「見たてまつりし春の夕の飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまをすこしけ近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせ」（若葉下④ 222）たいという一念であった。その柏木を見て語り手は「け近く、なかなか思ひ乱ることもまさるべきことまでは思ひもよらず」（同）と、意味ありげな評言をしていた。薫の場合、情念→思念→情念→思念というふうに最後には思念が勝つという点が、感情や情熱が先走ってしまう柏木との一番多きな相違点ではないだろうか。しかし薫は、女一宮への思いを断つこともできず、かなわぬ恋を嗟嘆するばかりである。

（女二宮に薄物の単衣の御衣を）手づから着せたてまつりたまふ。御袴も昨日の同じく紅なり。御髪の多さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず。氷召して、人々に割らせたまふ。取りて一つ奉りなどしたまふ心の中もをかし。絵に描きて恋しき人見る人はなくやはありける、ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、昨日かやうにて、我まじりぬ、心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。（蜻蛉⑥ 252～3）

薫は、女一宮への思慕ゆえの傷心を、その異母妹、女二宮を通じて慰めようとするが、その結果は「似るべくもあらず」であった。「昔から絵に描いて恋しい人を見る例はないではなかったが、ましてこの方は、心を慰めるのに不似合いではない妹宮という間柄なのに」と、薫は思う。女二宮に女一宮と同じ装いをさせることで、薫の中で、女二宮が女一宮に劣るという感覚がこびりついたことは重要である。しかし薫は、姉妹の縁によって女二宮宛に女一宮の筆跡を入手したり、中宮に姉妹同士の昵懇を求めたりすることしかできない。柏木が女三宮をかいま見したことは、柏木の宮への情念を噴出させる契機として働き、後の展開を大きく変えていったが、薫のかいま見は、女一宮が薫にとって永遠に手の届かぬ存在であることを示す結果となった。つづく物語には、薫が物語の男主人公に自分をなぞらえてみて、女一宮への思慕を「荻の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける」と詠みながら、わが半生への回顧を語る場面がある（⑥ 259～61）。この歌は、直後の地の文に「と書いても添へまほしく思せど」とあり、宮への贈歌として希望されたにもかかわらず、結果的には独詠歌として薫の心中に閉じ込められた歌である。ここでの「夕ぞわきて」という表現は、本歌として『源氏物語』中の二首の歌、「見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな」（夕顔① 189）、「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」（葵② 55）が指摘されている²⁵。また「夕べ」という言葉は、表現史の中で『源氏物語』の表現意識においては死に関わるすぐれて象徴的な時空として打ち出されている²⁶と言われている。とすると、この一首は、女一宮への思慕の表白でありながらも、それと同時に（浮舟の）死の愛惜としての表出でもあったということになるのだが、さらに注目されるのは、この「夕ぞわきて」

25 高橋亨「源氏物語の内なる物語史」『源氏物語の体位法』東京大学出版会、1982年、152～3頁。

26 河添房江「源氏物語における夕べ—その表現史的層—」『むらさき』19、紫式部学会出版部、1982年、11頁。

に酷似する表現が『源氏物語』に存在するということである。柏木巻で、柏木が死を思いつつ、女三宮と贈答する場面である。

「行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ
夕はわきてながめさせたまへ。咎めきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすく思ひ
なりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」(柏木④ 296～7)

女三宮は、柏木が小侍従を介して宮に伝えた「いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」(④ 291)の歌に対する返歌として「立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだる煙くらべに」の歌を詠んでいた。宮の歌は、柏木の理不尽な行動を恨んでいるが、柏木はそれを見て「あはれにかたじけなし」と思う。女三宮の「あはれ」の一言を求め続ける柏木の愛執は、宮の返書への柏木の返書にも表れている。「夕はわきて」について、諸注、先引の夕顔巻の歌「見し人の」が踏まえられていると指摘している。ここでは柏木自ら自分の死に対する宮の「あはれ」を求めており、夕顔巻の光源氏の歌とは逆の形になっている。蜻蛉巻での薫の歌における「夕ぞわきて」は、夕顔巻と葵巻の二首のみではなく、柏木巻の「夕はわきて」を踏まえているものと考えられる。この二つの表現は、女一宮への思慕と宇治の姫君たちへの恋が表裏をなす薫の心理構造を示していると同時に、死を目前にしても女三宮への愛執を断ちきれなかった柏木同様、薫もまた女一宮へのかなわぬ恋ゆえの心の彷徨を続けるであろうことを暗示しているのではなからうか。かなわぬ恋ゆえの憂愁の思ひは、反俗的な感情として、薫の日常的な栄華を精神的に支えている²⁷ものであった。反俗的憂愁と日常的栄華の共存は、柏木像には見られないところである。蜻蛉巻の後半部に低迷していく薫の様子が描かれていくことと、薫と柏木とのイメージの重ね合わせが宿木巻ほど鮮やかには表れないこととは無関係ではないだろう。「荻の葉に」の歌の直後の地の文には「さやうなるつゆばかりの気色にても漏りたらば、いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ」と語られている。薫の女一宮への思ひは、人々に知られることなく、屈折した形で露呈することになる。つづく物語で、秋の六条院で女房たちと戯れる薫は、女郎花の歌を詠みながら「つゆのあだ名をわれにかけめや」(⑥ 267)とする。「女郎花はどの露にでも濡れて乱れたりするものでしょうか」と好色なことを言う女房の返歌に対し、薫は「宿かさばひと夜は寝なんおほかたの花にうつらぬ心なりとも」(⑥ 268)とも言う。このやりとりは、大君の死後、薫がその本意とする道心からいかに遠ざかっているかを示している。薫は、亡き大君への思慕を自分の憂愁の原点とした(⑥ 260)が、恋の対象を見失った薫が、それに代わる別の人を求める物語は、もはや語られなくなっている。

わが母宮も劣りたまへるべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々の思しかしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほ、この御あたりはいとことなりけるこそあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひつづくることどもに、わが宿世はいとやむごとなしかし、まして、並べて持ちたてまつらばやと思すぞいと

27 阿部秋生 他『源氏物語』6「日本古典文学全集」頭注、小学館、1969年、254頁。

難きや。(蜻蛉⑥ 272～3)

薫は、例によって女一宮をかいま見した場所に行き、女郎花の歌を詠みあった女房と『遊仙窟』を引いたやりとりをする。その応酬で、薫は自分が「女一宮の母方の叔父である」とする。薫の母女三宮と、明石中宮と、女一宮の系図が再び読者の眼前につきつけられる。「后腹」という語に集約される薫と皇統との隔たりは、薫がそれへの執着を顕にすればするほど遠ざかる、想像よりもはるかに遠い距離として存在する。薫の女一宮思慕が顕在化すればするほど、女一宮が薫にとって手の届かぬ存在であることがはっきりとしてくる。上の引用箇所における「明石の浦」という表現は、若菜上巻で明石女御の出産が迫り、光源氏の栄華が完成に近づいたことが示されている中、父明石入道を思う明石の君の歌「世をすてて明石の浦にすむ人も心の闇ははるけしもせじ」(④ 108)において見られていたことも想起される。蜻蛉巻の「ただ人」の用例は、薫が女二宮と同じ衣装を着せる場面より少し後のところ、女一宮を慕い中宮のもとに参上した薫が、中宮の容貌の女一宮に似ていることを見て「あるまじきこと」と思う場面において見えている(「ただ人にならせたまひにたりとて、かれよりも聞こえさせたまはぬにこそは、心憂かなれ。」(⑥ 253))。

6. 「世づかぬ」薫

蜻蛉巻の前半部、浮舟の失踪を入水死として隠蔽しようとする右近と侍従二人の女房によって、浮舟の遺骸なき葬送が行われた後、事態を知った薫の心内は、次のように語られている。

殿は、なほ、いとあへなくいみじと聞きたまふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などで、今までさる所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸いたくおぼえたまふ。(蜻蛉⑥ 215)

上の引用文が、浮舟の入水死を知らされた後の、薫の最初の反応であることに注意したい。母女三宮の病氣平癒のため、石山参籠中であつた薫は、浮舟の葬儀が営まれたことを使者から聞き、浮舟がこの世に存在しないという事実の前に、茫然自失している。薫が、事の真相を知らされるのは、これより後のことであり、取り返しのつかない、あまりの突然のことであるだけに、葬儀が行われたことさえ、事実として受け止め難い心内が述べられているのだが、注意されるのは、「心憂かりける所かな、…などで、今までさる所に据ゑたりつらむ」と、浮舟を宇治に放置しておいたことへの後悔の念が述べられ、その叙述がそのまま、事を「わがたゆく世づかぬ心」のせいとする自らの内省へとつながっているということである。後文で、薫は、浮舟との「尽きせずはかなくいみじき世」を嘆きつつ、生前の浮舟の美貌を回想し「現の世には、などかくしも思ひ入れずのどかにて過ぐしけむ」と悔いる。浮舟との関係において、薫は、常に「心のどかにさまよくおはする人」(⑥ 261)であつた。どのような場面でも悠長にかまえるその性格を、浮舟の悲劇を生んだひとつの原因として見ることはできる。しかし「浮舟を大君の形代としか見なかつた薫に対し、匂宮は浮舟その人を心から

愛していた²⁸」という従来の見解は、上の引用部分およびこの後の物語に照らしてみたとき、従いがたい。大君の代償として中君を、中君の代償として浮舟を求める薫の、宇治のゆかりへの執着は、かれの道心志向とそれに相反する恋の情念との葛藤を示すものとして物語の中心をなしており、匂宮と比べてその思いの軽重を問うべき性質の問題ではないと思われる。薫の女一宮思慕と、宇治のゆかりへの関心は、薫の心の磁場の上に共存する。浮舟との死別に悲嘆しつつ、一方で女一宮のために新たな憂愁をかかえこむ²⁹、そのようなことが全く不自然ではない薫の心のありようにこそ、注意をはらうべきではないだろうか。柏木の場合は、意のままにならぬ現実との確執があったが、薫の場合はその物語の始まりから道心と栄華が与えられており、物語には、しだいにその道心から遠ざかり、女性への執着を強めていく薫のありさまが描き出される。一方で薫の栄華は揺るがないものとして、薫は「いみじき世の乱れも出で来ぬべかりしこと」(匂兵部卿⑤ 26)もなく、その栄華を保持しつづける。薫のやるせない思い、その底知れぬ憂愁のもとをたどっていけば、かれが光源氏の物語を覆すことからスタートした新しい主人公であったことに思いが至るかもしれない。

かくよろづに何やかやと、ものを思ひのはては、昔の人ものしたまはましかば、いかにもいかにも外ざまに心を分けましや、時の帝の御むすめを賜ふとも、得たてまつらざらまし、また、さ思ふ人ありと聞こしめしながらは、かかることもなからましを、なほ心憂く、わが心乱りたまひける橋姫かな、と思ひあまりては、また宮の上にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をこがましまで悔しき。これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さすがにいみじと、ものを思ひ入りけんほど、わが気色例ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけんありさまを聞きたまひしも、思ひ出でられつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわがありさまの世づかぬ怠りぞなど、ながめ入りたまふ時々多かり。(蜻蛉⑥ 260～61)

上は、前節にみた「萩の葉に」の歌につづく薫の心中思惟であり、薫のわが半生への回顧がたどられている。もし大君が生きていたら、他の女性に気を取られることもなく、皇女を得ることもなかったとする薫の心内、中君への思い、浮舟を失ったことへの悔しさなどが語られている。下線部「宮」は、言われるように女一宮、「女」は浮舟として読むべきであろう。そして薫自ら「世づかぬ」とするのは、男女関係における不慣れさのみを言っているわけではあるまい。薫の人生、何もかもが安定した環境に身を置きながら、女一宮のような手の届かぬ存在を希求するしかない、その「心」を観照しようとする薫の姿勢が「世づかぬ」という言葉からにじみ出ていると見ることもできるのではないだろうか。同じく「まめ人」であ

28 近時のものでは、坂本共展「浮舟物語の主題」(『源氏物語研究集成』2、風間書房、1999)がある。

29 阿部秋生 他『源氏物語』6「新編日本古典文学全集」頭注、小学館、1998年、252頁。

り「ただ人」でもある、夕霧の、落葉宮との物語における「世づかぬ」の用例³⁰からは、男女関係における不慣れさのみが読み取れるのであり、皇統との隔たりをそこから読み取ることとはできない。宿木巻には三例見られていた薫の「心おごり」の用例が、蜻蛉巻では一例も見られなくなっていることも想起される。「世づかぬ」薫は、その憂愁の思いを慰めてもらえる相手をもとめ、六条院の女性たちの間を彷徨う。そして蜻蛉巻の巻末には、もはや薫の手の届かない場所にいる女君たちを希い、その断絶を嘆くほかない薫の姿が描き出されるのであった。

7. おわりに

第三部の物語は、正編、特に第二部の物語世界を大いに利用し、その主題を引き継ぎながらも、全く新たな物語世界を創造している。そうした、続編独自の物語世界の構築には、新しい主人公薫の創造によるところが大きいのではなかろうか。第二部の密通事件の「罪」の子として生を得ている薫が、第三部の主人公として、いかにその与えられた人生を生きてゆくのであろうかということは、第三部の物語における重要なモチーフであったに違いない。実父柏木とはおのずと違うスタートラインに立たされた薫の心には、宇治の女君たちへの恋着だけが存在しているのではなく、至尊の女性、女一宮に対する思慕もその心の一部を占めていた。薫が、第二部の密通事件の結果として生まれたことの意味を、今一度考えてみる必要があるだろう。薫は、表向きには光源氏の子として、あくまで与えられた栄華の中に身を置く人物として描き出されるが、その一方、第三部の表現構造は、薫を、光源氏が歩んだ安定の道でも、実父柏木が突き進んだ破滅の道でもない、第三の道へと導いてゆく。それは、薫が光源氏と柏木の両方を受け継いでいる複雑で両面的な主人公であることを意味するのではないか。薫の、女二宮との結婚と女一宮への思慕は、何ひとつ不足しないように見えるこの人物の心の翳りを、第二部から引き継がれてきた主題の継承と変容の一端を、示しているといえよう。宿木巻の冒頭、女一宮に傾斜する薫の不遜な心が印象づけられていたが、巻末には、在位の帝の御婿としての薫の栄光が強調される一方、女二宮の「后腹」でないことが色濃く暗示される。そして、密通は起こらない。薫には、中君をわがものにすることも、女一宮との密会を果たすこともできない。薫の「おほけなき心」は、王権への侵犯をはかったその父と同じような展開を見せないのである。薫の「心」は、第三部後半部の閉塞した物語展開の中で行方を失ってしまう。薫には、「ただ人」の限界をはるかに乗り越えていった光

30 1)「なほかう思し知らぬ御ありさまこそ、かへりては浅う御心のほど知らるれ、かう世づかぬまでしれじれしきうしやすさなども、たぐひあらじとおほえはべるを、何ごとにもかやすきほどの人こそ、かかるをば痴者などうち笑ひて、つれなき心も使ふなれ、あまりこよなく思しおとしたるに、えなむしづめはつまじき心地しはべる。世の中をむげに思し知らぬにしもあらじを」(夕霧④408)

2)「いとまた知らぬ世かな。憎くめがましと、人よりけに思しおとすらん身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、言はむ方もなしと思してのたまへば、さすがにいとほしうもあり。「また知らぬは、げに世づかぬ御心構へのけにこそはと。ことわりは、げに、いづ方にかは寄る人はべらんとすらむ」とすこしうち笑ひぬ。(夕霧④467)

3)「内々の御心づかひは、このたまふさまにかなひても、しばしは情ばまむ。世づかぬありさまの、いとうたてあり、またかかりとてひき絶え参らずは、人の御名いかがはいとほしかるべき。ひとへにものを思して、幼げなるこそいとほしけれ」など、この人を責めたまへば、げにとも思ひ、見たてまつるも今は心苦しう、かたじけなうおほゆるさまなれば、人通はしたまふ塗籠の北の口より入れたてまつりてけり。(夕霧④478)

源氏の大きさ、その巨大な主人公像を築き上げるために積み重ねられた時間の重さがそぎ落とされており、それゆえに主人公としての描かれ方に「限り」が見られるのであった。「世づかぬ」薫は、第三部の物語構造により規定された「“負”の時間」の中を生きる、まさに「光」なき物語の主人公なのであった。

Study on a Viewpoint on the Lead Character Formation Method in the Sequel of “The Tale of Genji”: Focus on Kaoru, Onnaichinomiya · Onnaninomiya

TaeYoung KIM (Hankuk University of Foreign Studies)

【keywords】 Kaoru, Hikaru Genji, Kashiwagi, lead character, inferior position, sequel

This research analyzed the status of Kaoru as the lead character in the sequel of 『The Story of Genji』 from the viewpoint of correlation between the main part and the sequel. The expression of 『The Tale of Genji』 sometimes changed in Monogatari structure respectively in the expression in the main part and the sequel, based on it, the aspect of the logic and the theme of Monogatari acted strongly. The researcher considers the attempt to comprehend the intention of the writer, who selected Kaoru, born due to the adultery affair of the second part, as the lead character of the sequel is useful to comprehend the relation between the thematic succession and transformation that is continued from the main part to the sequel, and the expression and theme of Monogatari with the status of the character.

This research considered the meaning and the status of Kaoru as the lead character described in the expression structure of the 3rd section from the thematics and the expressive theory. From the thematic approach, Kaoru can be said to succeed negative properties as a child of illicit relation born from an adultery affair, accordingly, this research analyzed the significance of Kaoru as the lead character through first, relativization of Kaoru that appeared in the expression structure of the sequel, second, the analysis of quotation expression aspect and the characteristic of Kashiwagi that continuously appeared in the expression that was surrounding Kaoru. In Yadorigi part, the word Tadaudo was used as a major key word, which expressed the difference of status that stood out between the relationship with Hikaru genji, the lead character of the main part, also, this research concluded, in the aspect of Kaoru, who admired Onnaichinomiya, the best lady, while he married Onnaninomiya, the princess, it could imply development of the 2nd part, where Kashiwagi, the actual father of Kaoru, admired and committed adultery with Onnasannomiya, a daughter of Fujitsubonyogo, while he married Onnaninomiya and met destruction, and read the theme of the sequel which eventually reached a different point from the main part.